

多義語の意味拡張と意図性についての研究

A study on semantic extension and intentionality of polysemous words

栗田 優羽

Yu Kurita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：多義語，動詞の意図性，統合モデル

Key words : Polyseme, Intentionality of verbs, Integration models

1. 研究目的

本研究では認知言語学のプロトタイプ・アプローチの考え方にに基づき、動詞の多義構造を明らかにするモデルとして靱山 (2021) 『[例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』が提唱した「統合モデル」を検証する。その理論を基盤として、現代日本語動詞の意味の拡張と、動詞「招く」を中心とした〈事態を発生させる動詞群〉の意図性の弱化という言語事実の関係を考察する。意図性の弱化とは、多義語が意味拡張をする際に、プロトタイプの意味（人を招く）では意図性があったが派生した意味（誤解を招く）では意図性が弱まるという現象のことである。この現象は動詞「招く」のような〈事態を発生させる動詞群〉で起きやすいと思われる。そのため、〈事態を発生させる動詞群〉について統合モデルを用いて複数の意味の相互関係の明示を行い、意図性の弱化について考察する。

2. 研究実施内容

靱山 (2021) 『[例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から』が提唱した「統合モデル」を行うために、まず靱山 (2021) は何を「プロトタイプの意味」としているのかを明確にすることを試みた。

靱山は「複数の意味の中で直観的に最も基本的であると感じられるもの」が直観的プロトタイプとしており、その中で、「定着している度合いが高いこと」、「慣習性の度合いが高いこと」の2点が直観的プロトタイプの定義に含まれている。

「定着度」と「慣習性」は、靱山 (2021) に基づいて多義語を考える上で基盤となる「自立性」

の定義の中にも含まれる重要な概念である。靱山 (2021) では、定着度が高い状態については「容易に想起することができ、その語をその意味で使用することも容易である」状態としており、定着度が低い状態について、「個々の母語話者において意味を想起しにくく、聞いて理解することはできても、自らの発話では使用しない(使用できない)」状態としている。慣習性については「言語共同体の構成員によって共有されている程度のこと」としている。それらの程度の具体的な測り方については記載されていない。

定着度が高い状態がその語をその意味で使うことが容易であるのであれば、定着度が高いものは例文として出現する割合が高いと考えた。

しかし、この「定着度」「慣習性」という点を証明する方法としてコーパス内における意味の出現例数の割合は使うことができない。なぜなら「招く」の直観的プロトタイプは「彼女を手で招く」などの [1] 〈こちらに来るように〉〈相手に〉〈合図をする〉だが、卒業論文栗田 (2022) で調査した表1の742例中の [1] の出現例数は14例、わずか1.8%であり、一番多かったのは「誤解を招く」などの [3] 〈ある意図しない状況が〉〈引き寄せられ、存在するようになる環境を〉〈こちら側が作り出す〉という意味だったからである。

表1. 動詞「招く」の出現例数 (率)

[1] 〈こちらに来るように〉 〈相手に〉〈合図をする〉	14 (1.8%)
[2] 〈ある目的のために〉〈そ れに合う役割を持った人に〉 〈来てもらう〉	
[2.1] 「[相手]を[催し・目的] に招く」	117 (15%)
[2.2] 「[相手]を[場所]へ [催し・目的]に招く」	82 (11%)
[2.4] 「[相手]を[地位]に 招く」	105 (0.5%)
[2.3] 「[相手]を([催し・目 的]に)[役割]{に/として}に 招く」	4 (0.5%)
[3] 〈ある意図しない状況が〉 〈引き寄せられ, 存在するよう になる環境を〉〈こちら側が作 り出す〉	382 (51%)
[4] 「慣習的な知識として因 果関係があると思いきまれて いる」	38 (5%)
合計	742

3. まとめと今後の課題

このことから、「慣習性」「定着度」,「プロトタイプ」それぞれの定義を明確にし, 靱山 (2021) が多義語分析の前提としている「自立性」についても考察したい。しかし, 中心課題としているのは「招く」「もたらす」などの〈事態を発生させる動詞群〉の分析のため, 今後は「招く」と「もたらす」の意味分析を中心としながら, 靱山 (2021) に限らず「プロトタイプの意味」の認定の方法で比較分析を行い, より適した分析方法を探していきたい。

引用・参考文献

- [1] 靱山洋介. “多義語をめぐる諸問題”. [例解] 日本語の多義語研究 認知言語学の視点から. 大修館書店, 2021, p.3-5.
[2] 栗田優羽. “意味的な7分類の出現例数 (率). 動詞「招く」の意味分析”, 大妻女子大学文学部卒業論文, 2022, p.25-26.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 (DB2215) 「多義語の意味拡張と意図性についての研究」を受けたものです。